

## 憲政資料室所蔵稲垣満次郎書翰（史料翻刻）

柴崎 力栄

知的財産学部 知的財産学科  
(2015年5月30日受理)

INAGAKI Manjiro's Letters stored at the National Diet Library

by

Rikiei SHIBASAKI

Department of Intellectual Property, Faculty of Intellectual Property

(Manuscript received May 30, 2015)

### Abstract

The National Diet Library in Tokyo possesses and stores eight Inagaki Manjiro's (稲垣満次郎) letters at the reading room Kenseishiryoushitsu (憲政資料室). One was addressed to Kabayama Sukenori (樺山資紀), another three were addressed to Kurihara Ryoichi (栗原亮一), and the other four were addressed to Matsukata Masayoshi (松方正義). These missives reprinted here are mainly related to Inagaki's Japan lecture tour from March 5 to July 9 in 1892.

キーワード ; 稲垣満次郎, 樺山資紀, 栗原亮一, 松方正義, 憲政資料室

**Keyword ; Inagaki Manjiro, Kabayama Sukenori, Kurihara Ryoichi, Matsukata Masayoshi,  
Kenseishiryoushitsu**

---

## 憲政資料室所蔵稲垣満次郎書翰（史料翻刻）

知的財産学部 知的財産学科

柴崎力栄

（二〇一五年五月三〇日受理）

## 解説

国立国会図書館憲政資料室で閲覧可能な受信人三名、即ち、樺山資紀、栗原亮一、松方正義に宛てた稲垣満次郎書翰八通を翻刻する。同室で閲覧可能な稲垣書翰には他に早稲田大学が所蔵する大隈重信宛五通もあるが、早稲田大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第一巻（みすず書房、二〇〇四年）に収録されているので、今回の対象外とした。排列は、受信人名の五十音順に並べ、同一受信人宛では差出順とし、年代が不明な書翰は末尾に置いた。

明治日本において海洋国家地政学的な政策指向をもった人物として、福沢諭吉、肝付兼行、榎本武揚、稲垣満次郎、徳富蘇峰、志賀重昂らの動向に興味をもち、関連書翰史料を探索してきた。このうち、本紀要では、過去に、「徳富蘇峰宛稲垣満次郎書翰（史料翻刻）」（人文社会篇五八巻二号、二〇一四年二月）、「肝付兼行書翰（史料翻刻）」（五九巻一号、二〇一五年九月）を紹介している。

稲垣満次郎（一八六一年～一九〇八年）は、「明治時代の外交官」（吉川弘文館『国史大辞典』、平凡社『日本人名大辞典』）として記憶される人物であるが、一八九一年、英国留学から帰国してから、一八九七年にシヤム王国駐劄公使に任ぜられるまで、言論家としての活動期間があった。収録書翰は、その時代のものである。おもに、一八九二年の三月から七月にかけての稲垣の国内巡遊に関連している。

この講演と視察を兼ねた旅行に関する研究には、中川未来「一九世紀末日本の世界認識と地域構想……「東方策士」稲垣満次郎の対外論形成と地域社会への展開」（『史林』九七巻二号、二〇一四年三月）がある。中川氏は、京都の『日出新聞』、『読売新聞』、そして、樺山宛「1.」と松方宛「2.」を参照している。それだけでは稲垣の巡遊を理解するには足りないかと考

え、今回、各府県の地方紙を精査することで、旅行経路と講演地、視察地を特定した。旅行の行程で第一に気づくのは、当時、稲垣の言論活動を支援していた年長者たちの郷里を訪問する旅となっていたことである。旅行前半の講演地を列記すると、東京出発以降、↓神戸↓熊本↓鹿児島↓長崎↓佐賀↓福岡↓山口↓広島↓岡山↓高知↓京都、である。東海道本線を利用する以外は、海路による移動であった。訪問先に、鹿児島（松方正義）、佐賀（副島種臣）、高知（谷干城）が含まれている。第二に、国際航路に接続する築港予定地視察が組み込まれていることが判る。長崎では、郷里の平戸に帰省し、さらに、佐賀県東松浦郡の仮屋湾を視察している。仮屋は、当時、水路部長の肝付兼行がウラジオストクから華北、華中方面への国際航路に対する貿易港候補地とする意見を発表していた（『西比利亜鉄道に対する日本の開港場を論ず』、東邦協会報告第九、一八九二年一月）。ともに東邦協会の会員である肝付と稲垣の間に意見の共有があり、その結果の仮屋訪問であったと推測される。京都を出発後の旅行後半でも、敦賀（福井県）、伏木（富山県）、七尾（石川県）、船川（秋田県）と、肝付が列挙した候補地を視察している。一方、稲垣は、旅行出発直前の二月二十七日、海上交通線の将来予測と、それに対応した港湾整備、海軍の拠点とすべき要地の特定などの内容を含む講演「東洋の大勢上大島と台湾と孰れが優れる」（東邦協会報告第十一、一八九二年四月）を、東邦協会で行なっていた。西南方面の制海権を握るには奄美大島と台湾（澎湖諸島を含む）はともに枢要であるとの結論であった。両者の協働によりどのような海洋国家構想が伝えられたかについては別稿を用意している。その機会に譲りたい。今回の翻刻は関連史料を事前に公表しておく趣旨である。

以下、書翰ごとに解説を付して行く。

樺山宛「1.」は、松方宛「2.」とほぼ同文である。両書翰が投じられ

た時点では、樺山資紀は第二次松方内閣の海軍大臣、松方は総理大臣であった。松方宛書翰と樺山宛書翰は厳密に同文ではなく、表現の揺らぎがある。両者を対比し、傍線を付すことで文言が異なる箇所を示した。

栗原宛「1.」は、栗原亮一「国是論」を収録した白川正治編『自由新聞論纂 第一編』（加藤勢太郎、一八九一年二月）の惠贈を受けたことに對する礼状である。栗原亮一は板垣退助側近の自由党幹部で、衆議院議員、自由新聞社の主筆であった。この書翰の時点では、稲垣は栗原と直接の面識を得ていなかった。

栗原宛「2.」は、稲垣著『東方策 第一篇』（一八九一年六月）についての批評を栗原から得たことへの礼状である。まだ、栗原と面談の機会をえていないことが文面から読み取れる。

栗原宛「3.」からは、「1.」「2.」の書翰以降、栗原と面識を得る機会があったが、その後、板垣退助への紹介を乞うため栗原邸を訪問したところ、栗原の不在のため面会が叶わなかった経緯が読み取れる。板垣との面談の希望は、各府県の自由党関係者への紹介状を依頼するなど、国内巡遊の下準備であった可能性が考えられる。『日本』一八九二年三月四日三면「稲垣満次郎君の全国漫遊」に、

発前一日君が話に云く余は指さす所の地方に就き成るだけ多く各政党の重なる人々より紹介状を請ひ受け、又成るだけ多く当局者より  
の紹介状をも請ひ受けたり

とあり、また、『福岡日日新聞』同年三月十三日二面「稲垣満次郎氏の漫遊」に、

今回の遊歴は松方、大隈、板垣諸伯等の力を添ゆるありて到る所に  
対外策を演説すべく

と記されていることからの推測である。前掲中川論文によると稲垣が英国留学から帰国したのは一八九一年二月であり、前掲『日本』記事によれば、国内巡遊出発は一八九二年三月五日である。栗原宛「3.」の発信はこの間の九月二十二日であることから、差出年を一八九一年と推定した。

松方宛「1.」では、国内巡遊の出発を「来月」、すなわち、一八九二年二月と記している。一八九一年十二月二十五日に松方内閣は衆議院を解散し、第二回衆議院議員総選挙が行なわれたのは翌年二月十五日であった。「干渉選挙」の混乱を避けるため、出発を一ヶ月延期し三月五日とした経

緯を推測させる。

松方宛「2.」は、樺山宛「1.」とほぼ同文の書翰である。書翰冒頭の裏面に、史料として受け入れ後の整理に際して、鉛筆で「稲垣満次郎代筆（夫人？）」との書き込みがあることの事情を考察して置きたい。松方宛と樺山宛の両書翰は、他の稲垣書翰が草書体の大きめの文字で記されているのに比して、小振りの行書体で書かれており、行間も整っている。松方宛「2.」だけを見て、史料整理を担当した国会図書館憲政資料室の職員が、女手である可能性を考えたのであろう。今回両書翰を対比した結果、稲垣本人によって記された書翰であると判断した。表現の揺らぎがあり文言の差異があることは代筆では発生し難く、稲垣本人だからこそ文章の流れを自由闊達に変化させることが出来たと考える。通常巻紙を左手で持ち、机を使わずに書翰を認めたのに対して、この二通は巻紙を机上に広げて認められたのであろう。

松方宛「3.」は、一八九二年七月九日に巡遊から帰京した後、稲垣は松方を二度訪ねたが面談の機会を得ていないことを窺わせる。第一次松方内閣が総辞職したのは同年七月三十日であり、その直前の政治的行情が背景として存在したと推測される。

松方宛「4.」は差出年不明である。鹿児島県人、河野主一郎を府県知事に取り立てることの依頼である。松方が総理大臣を務めている期間であり、同時に「漫遊中実地視察上より割出し候我國の国策」という文言から一八九二年を考えるが、確証がない。

最後に、凡例的な事項を述べる。

翻刻のスタイルは、かつて共編した『徳富蘇峰関係文書』全三巻（山川出版社近代日本史料選書七・一〜三、一九八二年、一九八五年、一九八七年）を踏襲した。同シリーズ三「凡例」の文言を引用すれば、つぎのようになる。「復刻に当たっては、なるべく原形を尊重した。但し、適宜句読点・濁点を付し、片かな・変体かなは原則として平がなに統一した。明らかな誤字・脱字等は傍註で示し、誤用慣用は史料通りとした。また字体は原則的に新字を使用した。」「推定差出年月日には（ ）を付した。なお、どうしても解読できない文字は □ に置き換えた。

本文

榊山資紀宛稻垣満次郎書翰（国立国会図書館憲政資料室榊山資紀関係文書）

1. 明治（25）年7月11日

一翰拜呈仕候。酷暑之候御坐候処、愈御清適恐悦至極奉存候。陳ば小生儀一昨日全国漫遊を終え無事帰京仕候。早速拜趨可仕候へ共、国家多端之際御多忙之御事と存じ、差扣罷在候。何れ近日参邸可仕候。扱て京都より関西漫遊之実況御報申上置候。其後京都出發、敦賀港巡見、海路金沢に出で、高等中学校に於て中学師範兩校の職員生徒を集め對外策上の教育論を演説し、聴衆も五六百、感動も甚だ宜敷御坐候。又商法会議所の招に應じ對外策の演説を致し、政党の彼是を論ぜず七百余名参集、整肅にて傍聴致候。金沢の如き政党競争之激しき所にては先づ希なる事に御坐候由、夫より富山に出で中学師範兩校の生徒を集め、東洋の大勢上より德育策を述べ、又富山市有志家の請に應じ對外策を演ずること三時間余、聴衆は改進、自由、大同を論ぜず七百余名参集、懇親会の如きも三政党全体七十余名臨席、最も懇和之情相見申候。夫より伏木港に出で該港及び七尾を巡覽、伏木港に於ても對外策の演説致し聴衆四百余名有之候。海路新潟に出で先づ中学師範兩校の教員生徒及び有志家六百余人に對し對外策上の教育論を述べ、又自由、改進、國權の三党の催にて對外策に就て四時間之演説を為し、聴衆千三百人余有之候。其他新潟県下に於ては長岡、三条、巻、新発田之各地に於て各三時間余對外策を演じ、聴衆合計四千三百人余有之候。各所之懇親会にも政黨員、官吏の區別更に無之、五十名、六十名若くは百名と臨席有之候。是より酒田を経て秋田に出で、自由、中正兩党の催にて對外策の演説仕り、聴衆も七八百人有之候。其日の懇親会には兩黨員及び官吏合同六十名臨席有之候。其後秋田県教育会の招に應じ德育策を述べ、聴衆六百余人、其他土崎、能代、鷹巣及び大館に於て對外策の演説致し、各所とも最も盛会にて聴衆合計二千四百人余、懇親会之如きも六十人七十人之臨席者有之候。且つ政党の色別等は更に無御坐、是より青森に出で、對外策之演説致し、聴衆三百人余、函館に渡り商工業会の發起にて對外策を演じ、該港の実業家中屈指の人々其他聴衆六百余名有之候。夫より直に仙台に出で全国漫遊最終の商工

業政治の三大策及び此対策より割出たる国策等を全国漫遊の實際上より演説致し、聴衆二千三百人余有之、此を述べて三時間半、先づ此にて全国漫遊相終申候。此の如にて全国人民中政党の彼是を問はず、官民を論ぜず、虚心平氣に国家問題として對外策の演説を聞きし一点に至ては誠に国家の爲め喜悅罷在候。且つ其数も全国中にて三万八千以上四万の間に有之候へば、幾分か全国に對外の思想を起さしめ、内国の小事に齷齪たる現今の通弊、幾分か相減じ候はんかと存罷在候。其他国策上の意見、地方実況、各所に於て地方人民を警戒致し候義は参邸の折、緩々御話可申上候。恐惶謹言

七月十一日

稻垣満次郎

榊山資紀殿閣下

「註」書簡の部三〇、リール一。封筒表、麴町三年町、榊山資紀殿、親展。封筒裏、麴町下六番町四十四番地、稻垣満次郎。差出年は消印による。

栗原亮一宛稻垣満次郎書翰（国立国会図書館憲政資料室栗原亮一関係文書）

1. 明治24年7月27日

貴札拜展仕候処、時下酷暑之候に御坐候得共、益御清康恐悦奉存候。陳ば今日は貴札並びに国是論御投与下され確受仕奉拜謝候。何れ御論は再々拝読の上にて御高教を蒙り可申上候。將又た不取調の拙著に付御高教を玉はる旨実以て御厚情感銘且つ幸栄の至りに御坐候。

且つ又た兼てより御高名之程承り居り候得共、不幸にして未だ拝眉之榮を得ず、平生遺憾之至に存居り候中に御坐候。就ひては近日内何れにてか御出合仕度切願に御坐候。何れ其折り御高論拜聴仕り可申上候。書万一を尽さず候。早々不宣

七月廿七日

稻垣満次郎

栗原亮一殿足下

御来訪の折は前以て御一報奉希候。

〔註〕書翰の部二一一二、リール一、一八六〜一九〇コマ。封筒表、本郷駒込千駄木林町三十四番地、栗原亮一殿、貴酬。封筒裏、二四、七、二八、北豊島郡日暮里村元谷中本村千百三十五、稲垣満次郎。

2. 明治24年8月1日

短札拝呈仕候。過日来より拙著に対し明細詳密なる御批評被成下竊かに光栄と存候。御寄与相成候国是論早速拝誦仕候処、西洋各国々是を御論断なされ候廉々孰れも明確に御座候も、就中日本の国是論に至りては御卓識之程感心仕候。何れ近暇中拝眉を得御高話承るべく、且又愚見をも可申上候。

八月一日

拝具

稲垣満次郎

栗原亮一様

〔註〕書翰の部二一一一、リール一、一八一〜一八五コマ。封筒表、本郷駒込千駄木林町卅四番地、栗原亮一殿。封筒裏、日暮里村、稲垣満次郎、二四、八、一。

3. 明治(24)年9月22日

拝啓 先日は端書被下拝誦仕候。過日は御訪申上候得共御不在にて残念に存候。小生御訪致候は実は板垣伯に御面会の紹介を御願申上度、罷出たる次第に有之候。何卒宜敷様奉願候。若し小生直ちに御面会致候も宜敷候は、伯の御都合好き時刻を御聞き置き被下、乍御手数御一報被下度候。余は何れ拝眉の上委細申述べ候。勿々頓首

九月廿二日

稲垣満次郎

栗原亮一様

〔註〕書翰の部二一一三、リール一、一九一〜一九七コマ。封筒なし。

松方正義宛稲垣満次郎書翰（国立国会図書館憲政資料室松方正義関係文書）

1. 明治(25)年1月29日

頃日は御不加減にあらせらる由、如何あらせらるゝや奉候。且つ又た国家多事御配慮之御事と奉存候。小生義も商工業対外策の出版事務相終え候ゆえに、来月には九州へ下り、九州之奴輩を対外策上の大義を以て片端から打ち付ける覚悟にて用意罷在候。何れ拝眉の上にて愚見可申上候。明日午後五時頃又□参上可仕候。若し其時刻御不在にあらせなば御一封御遣し置き下され度奉懇願候。敬白

一月廿九日

稲垣満二郎

松方伯殿

〔註〕書翰の部二六一三。封筒表、松方伯殿、必ず親展。封筒裏、朱印「東京麹町区下式番町三十四番地、稲垣満次郎」。

2. 明治(25)年7月11日

一輪肅呈仕候。嚴暑之候御坐候処、愈御清適恐悦至極奉存候。陳ば小生儀一昨日全国漫遊相終え無事帰京仕候。早速拝趨可仕候へ共、国家多端之際御多忙之御事と存じ、差扣罷在候。何れ近日参邸可仕候。扱て京都より関西漫遊之実況は御報申上置候。其後京都出発、敦賀港巡見、海路金沢に出、高等中学校に於て中学師範両校の職員生徒を集め対外策上の教育論を演じ、聴衆も五六百、感動も甚だ宜敷御坐候。又商法会議所の招に依り対外策の演説致し、政党の彼是を問はず七百余名参集、整肅に傍聴致し候。金沢の如き政党競争之激しき所には先希なる事に有之候由、夫より富山に出で中学師範両校の教員生徒を集め、東洋の大勢上より徳育策を述べ、又該市有志家の請に応じ対外策を演説すること三時間余、聴衆は改進、自由、大同を論ぜず七百余名参集、懇親会の如きも三政党合同、七十余名臨席、最も懇和之情相見申候。夫より伏木港に出で該港及び七尾に巡覽、伏木港に於ても対外策の演説仕候。聴衆四百余名有之候。海路新潟に出で先づ中学師範両校の教員生徒及び有志家六百余人に対し対外策に就き四時間演説し、聴衆千三百余人有之、其他新潟県に於ては長岡、三条、巻、新発田之各地にて各三時間余対外策を演じ、聴衆総計四千三百人余有之候。各所之懇親会にも政党员、官吏の区別更に無之、五十名、六十名若くは百名と臨席有之候。是より酒田を経て秋田に出で、自

由、中正両党の催にて対外策の演説致し、聴衆も七八百人有之候。其日の懇親会には両党員及び官吏合同六十人臨席有之候。其後秋田県教育会の招に応じ徳育策を述、聴衆六百余人、其他土崎、能代、鷹巣及び大館に於て対外策の演説仕、各所とも最も盛会にて聴衆総計二千四百余人、懇親会之如きも六十人七十人之臨席者有之、且つ政党之色別等は更に無御坐、是より青森に出で、対外策の演説致し、聴衆三百余人、函館に渡り商工会の發起にて対外策を演じ、該港の実業家中屈指の人々其他聴衆六百余人有之候。夫より直に仙台に出で全国漫遊最終之商工業政治の三大策及此対策より割出たる国策等を全国漫遊の實際上より演説し、聴衆二千三百人余有之候。此を述ぶること三時間半、先づ此にて全国漫遊相終申候。此の如にて全国人民中政党之彼是を問はず、官民を論ぜず、虚心平氣に国家問題として対外策の演説を聞きし一点に至ては誠に国家の為喜悅罷在候。且つ其数も全国中にて三万八千以上四万之間に有之候へば、幾分か全国に對外の思想を起さしめ、内国の小事に齷齪たる現今の通弊、幾分か相減じ候はんかと存罷在候。其他国策上の意見、地方の実況、各所に於て地方人民を警戒致し候義等は参邸の上緩々御話可申上候。恐惶謹言

七月十一日

稲垣満次郎

松方正義殿閣下

「註」書翰の部二六―四。封筒なし。冒頭裏面に、鉛筆で「稲垣満次郎代筆（夫人？）」と書き込みあり。

### 3. 明治（25）年7月27日

国家多事之際益御安恭奉恐悦候。陳ば帰京後二度拝訪仕候得共、御留主中にて拝眉を得ず、今日も参上仕候得共、又た拝眉を得ず。就ひて明朝参上色々御相談仕度義も有之、且つ我邦之国策に付き上申仕度候故に、早朝参上可仕候。恐惶謹言

七月廿七日

稲垣満  
一一

郎

松方伯殿

「註」書翰の部二六―一。封筒表、松方伯殿、必ず親展。封筒裏、稲垣満二郎。

### 4. 明治（ ）年7月16日

国家多事之際益御清榮為邦家奉恐悦候。陳ば小にしては鹿兒島の為め、大にしては日本の為め誠意申上度義有之候。そは他にあらず鹿兒島全県分離相視視し誠以て惨情□ふに忍びざる次第に御坐候。此際に當つて、一郷の重きを一身に負ふ人は即ち河野主一郎氏なり。全氏の人と為りは小生よりも閣下能く御承知の御義と奉存候。全氏も日本の現状を憂られ、位官高からずと雖ども、出仕国家に報せんと決心致され候。就ひては府県知事位にても宜しかるべく、閣下御推撰の道はあらせられず候や。尤も全氏も履歴も有之人に御坐候得ば、可成三府五港の一なれば都合宜しくあらるべく存罷在候。此事樺山子へも今日書面を以て申上置候。河野氏承諾の義は小生義勿論御請合可申上候。河野氏にして出仕あらば鹿兒島全県の形勢一変すること疑ひこれなき義に存罷在候。一昨日も一寸参上仕候得共、御留主中拝眉を得ず。何れ明日若しくは明後日には参上、漫遊中実地視察上より割出し候我國の国策即ち我國の為さざる可からざる事実問題、意見は陳述可仕、兎も角河野主一郎氏の一件は御親慮を仰ぎ度、為邦家奉願候。恐惶謹言

七月十六日

稲垣満次郎

松方伯殿

二白 此書状は他見は一切憚からるゝ義に御座候。敬白

「註」書翰の部二六―二。封筒表、松方伯爵殿、必ず親展。封筒裏、麴町区下六番町四十四番地、稲垣満次郎。